

ニュースレター 第3号
平成3年 月 日

日本精神保健看護学会

The Japan Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing

事務局：

〒150 渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学内
(学会会長：稲岡文昭)
TEL：03-3409-0875
FAX：03-3409-0589

第1回日本精神保健看護学会総会・学術集会報告

暑い盛りの7月に第1回総会および学術集会が開催されてから、あっというまに深まる秋を迎えました。今年もあと2ヶ月余りを残すところとなり、精神状態が揺らいでおります。遅くなりましたがニュースレター第3号をお届けいたします。

第1回設立総会は7月6日(土)午後1時から日本赤十字看護大学講堂で会員多数の出席のもとに開催されました。議長として平沢久一氏が選出され、運営委員会事業報告、運営委員会収支決算報告が行われました。次いで、運営委員会提案の第1号議案：平成3年度事業計画(案)、第2号議案：平成3年度収支予算(案)、第3号議案：役員選出(案)が審議されました。いずれの議案も原案どおり可決されました。詳細な審議結果は、このニュースレターの折込みをご覧ください。

第1回学術集会は、同大学で、「いま、なぜ精神看護学なのか」をメインテーマとして総会後および翌日にわたり行われました。「対談」、「6グループに分かれてのワークショップ」、「懇親会」、「一般演題発表」、「シンポジウム」と盛りだくさんのプログラムが生まれ、一部、主催者側の不手際からご迷惑をおかけしたところもありましたが、それぞれ盛況裡に終了いたしました。会員148名、非会員121名、報道関係者15名、計284名の参加があり、回収したアンケートによりますと、一般的にみて、「とても刺激になり勉強になった」、「少しもの足りないところもあったが、若い人が多く、真剣にディスカッションをしたり、研究に取り組んでいたり、これからも頑張らねばならないと思った」など、この学術集会を肯定的にとらえている意見が多くみられました。特に、1演題につき討論の含め30分の「一般演題発表」は好評でした。そのほかその他、学術集会のもち方にえついで鋭く指摘された意見や建設的な意見が多数寄せられました。

今回の設立総会で理事長の役をおおせつかり、責任の重大性を痛感しております。理事一同、皆様方の貴重なご意見を参考に、精神保健看護学会を着実によりアカデミックな学会に育んでいきたいと思っております。皆様方のご支援・ご協力お待ちしております。(理事長、稲岡)

1. ワークショップ「精神力動概念をもちいた事例検討」

長谷川病院 粕田孝行

高知女子大学、宮内美紀子さんより、摂食障害の事例が提出され、その報告が行われた。会場より、事例の力動をどう理解するのか、またアプローチのあり様、事例に対するチームのかかわりなどの意見が、出された。しかし、ワークショップの目的でもあるこのケースの生育歴、生活史によって培われた精神内界をどう理解し、現在生じている症状、対人関係のあり様がそれぞれどう深くかかわっているのかなどの力動的アプローチの視点を会場のメンバー全員と共有することは、司会・進行の腕不足で不完全燃焼に終わったように思う。

来年は、その点を反省し、力動的アプローチの視点の学習を会のメンバーと共有できるような進行を試みたいと思ったことで、この会の報告としたい。

2. ワークショップ「精神保健学の展開方法」

東京女子医大看護短大河野雅資

参加者は約20名であった。他に出版社の方が3名参加されていたのが特徴であった。まず、参加者の自己紹介から始めた。参加者の多くは看護婦(士)であった。次に、ファシリテーターが実際に展開している「精神保健学」の内容について紹介と説明を行った。その次に2つのグループに分かれて、誰が、どんな内容を教授すればよいのか意見交換を行った。それから、全体で双方から意見を紹介して討議をした。最後に、ファシリテーターがまとめる、という進行であった。

まとめの内容を紹介すると次のようである。

○誰が精神保健学を担当しているか

参加者の中で精神保健学の単位認定の責任を持っているのは2名であった。

多くの学校では精神科医が精神保健学を担当していた。

看護婦が精神保健学の「性の発達と健康」の内容だけを担当している人は割にいた。

○どんな内容を教授しているか

精神保健学で何を教えなくてはならないかはっきりしない

他の教科目との関連でしわよせがきている

精神医学を教授しているところもある

<問題点>

・臨床ですぐ動けるナースを期待すると、臨床にでて3年ぐらいは患者の心理的などころまで考える余裕がもてない。

・臨床にでて4-5年すると患者の心理について興味が出てくる。学生のうちにどの位教授したらいいのか、明らかになっていない。

・精神保健学の教科書は看護婦以外の人が殆ど執筆している。

<解決策>

・精神保健学の柱を明らかにする。

・看護婦が教科書を執筆する。

・看護婦が精神保健学を担当して、看護の目からみた患者心理を教授する。

・複数の看護婦が専門領域の精神保健を担当する。

・看護婦自身のセルフコントロールも強調する。

3. ワークショップ「精神科看護の実習指導」(第3回精神(科)看護実習検討会)

日赤看護大学 中川幸子

精神科実習の教育と臨床の接点を求めて少しずつ回を重ねてきました実習検討会を、今回は日本精神保健学会学術集会ワークショップとして開催いたしました。

第1回、第2回と介入観察や北里大学での実習の実際など精神科看護実習について具体的にレポートしていただき、話し合いを進める中で疑問になってきたことは「実際に、各教育施設でどのように精神科実習を行っているのか」ということでした。

そこで、事前に第2回のグループ討議の中からでてきた疑問点をまとめ、調査用紙を作成し全国の看護短大に送付し回答をお願いしました。その結果90%近い回収率を得ることができ、カリキュラムの改正、精神保健法の改正のなかで精神科看護実習についての関心が高まっていることを実感させられました。

今回の検討会ではこの結果報告と、これを基にグループディスカッションを行い、臨床と教育

の両面から精神科実習について考え、意見交換の場を持ちました。

調査結果として、専任で精神科看護に携わる教員が予想外に高率であり、また、専任で実習担当を行う教員のいる方が、病棟に実習担当スタッフを置いている率が高いという結果が得られ、このことから精神看護学のカリキュラム上の柱だての必要性を意識させられました。

さらに結果報告の後のグループディスカッションでは、実習場の環境の違いはあるが、具体的にどこを看護基礎教育の学生の実習目標とするのかが議論になりました。実習目標を問題解決とするのか、人間関係を焦点とするのかは、以前から話題になっておりましたが、複数の実習をひき受ける臨床の意見は考えさせるものがありました。

今回は、「学生に学んでほしいこと」を取り上げ、教育、臨床双方の視点、特に臨床側の視点から企画してゆく予定であります。

4. ワークショップ「看護におけるグループ・アプローチ」 日赤看護大学 武井麻子

今回のワークショップは初回ということもあり、ねらいをどこに定めるかが難しくこのことが最後まで課題として残ったように思う。すなわち、看護婦として普段体験する集団というものを、体験を通して改めて知ろうとするものか、あるいは集団精神療法の具体的方法を学ぼうとするものかという課題である。

グループのなかで実際に誰が何を言い、どうなったかについては、グループの約束事として詳細は紹介できないが、このグループには精神科以外の看護婦の参加が比較的多く、前半ではそうした参加メンバーから、身体的な問題と精神的な問題を併せ持ち、対処に苦労している患者さんの話題がいくつか提供された。また、そうした流れに対して違和感を表明したメンバーがあり、それをめぐって反発やとりなしの意見が出されるというようなことがあった。

休憩をはさんで、後半では前半に何が起こったのかについてファシリテーターである筆者が解説するという形になった。筆者の感想としては、このグループのは互いを探り合うようなプロセスが殆どなく、すぐに話題に入っていったのが印象に残っている。看護婦の集りという前提を皆が無条件に受け入れ、その点で不安がなかったのか。不安を表明できるほどファシリテーターを信頼できてはいなかったのか。今となると後者の可能性も高いような気もしている。

また、後半では集団精神療法のやり方についての解説も行ったが、今後は、むしろ体験的なものを重視して、専門を越えてグループなるものを理解しようという方向でやっていきたいと考えている。

5. ワークショップ「リエゾン精神看護」 聖路加看護大学 小代聖香

リエゾン精神看護のワークショップでは、事例を通してリエゾン精神看護に必要な知識、技術、介入方法はどのようなものであるのかを探っていく作業を行いました。

事例提示は、聖路加国際病院婦長兼リエゾナーズの川名典子氏、スーパーバイザーは聖路加看護大学の南裕子氏でした。川名氏から提示のあったケースは、患者へのアプローチのしかたを教えて欲しいという看護スタッフからの依頼ケースでした。その患者は悪性リンパ腫で治療の効果がうまく出ず、患者は治療は無意味だから退院したいと希望しているというものでした。この事例をどうアセスメントするか、リエゾナーズとしてどのよな介入方法があるだろうか、という点について意見を出し合いました。事例のアセスメントについては、患者、医師、家族について様々な観点からの情報が必要であるという意見が出され、患者の身体状態、精神状態、組織のダイナミクス等がアセスメントされましたが、看護婦自身の状況についてのアセスメントがなされにくいという特徴がありました。これまで事例検討は患者についてばかり行ってきたために、看護婦の問題には目が向きにくいのかもかもしれませんが、この事例は患者というよりはむしろ看護婦の葛藤に問題の本質があると考えられました。つまり、患者は自分の力で自分の状況をコントロールしようとしているけれども、看護婦の方が患者の先の見えなさにフラストレーションを感じそれに耐えられなくなっているのです。患者のケアにあたる看護婦は患者の近くにいるために患者に同一化し、かえって患者の状況が見えにくくなったり、感情が揺れて先が見えなくなることがあるのです。その揺れに付き合い、患者をどう捉えればいいのかを話し、そのようなプロセスを通して看護婦をサポートすることがリエゾン制n看護の介入の大きな柱なのではないか、という話し合いがなされました。参加者の積極的な討論でリエゾン精神看護の介入の一つの方向性が見えてきたグループワークでした。

6. ワークショップ「カウンセリングから学ぶ—その理解と伝達—」 千葉大学看護学部 横田 碧
まず、レポーターの大正大学カウンセリング研究所研究生の遠藤淑美さんが、「現在にいたるまでの内的過程・そのプロセスで気づいたこと」というB4版1枚のレジュメにそって、自分とカウンセリングとの出会いからその深まりを求めて研究中の現在までを、具体的なエピソードにその時の気づきをまじえながら、実に率直に偽りなく、自分の言葉で語って下さった。

看護学生→自治体保健婦→大学院生→看護短大助手→カウンセリング研究生、との変遷をたどる10余年の過程の豊かさは、とても30分くらいでは語り尽くせぬものであった。

しかし、6人つづ8グループにわかれての自由な話合いに移ったとき、レポーターの素直な自己表現の流れにのってか、参加者も実に自由に、ほとんど沈黙の時間もなくてスーッと話合いに入っていた。初対面の人達も多かったであろうが、何年来の知己のように、明るく活き活きと、時には笑い声のはずんで、ストップをかける司会者はつらい気持ちになってしまった。

コメンテーターの見藤隆子先生の、その自由で親密な雰囲気存在に触れながら、レポーターの報告の「自分に触れ得ない→自分に触れた感じ→相手に届きたい→相手に届けたい→相手に届く自己開示の必要→開示する自己は？」の流れの先に、「相手がどう自分に届いているか？→より届くようにありたい→少しずつ届いてくる→いつの間にか変わっている→」という方向性があることを示唆された。

この会場にはメンバーの1人として中井久夫先生が参加しておられ、同じグループになった人は自分が話せなかった分だけ先生のお話が聞けて、また別の意味で貴重な体験ができた様子であった。感謝！

第2回学術集会のお知らせ

*とき : 平成4年7月4日(土)、5日(日)

*ところ : 日本赤十字看護大学(東京)

*メイン・テーマ : 精神看護の未来と現実

*プログラム

<第1日>	14:00-15:00	基調講演: 稲岡文昭氏(日本赤十字看護大学)
	15:15-17:30	ワークショップ
	18:00-20:00	懇親会(日本赤十字看護大学内)
<第2日>	9:30-12:00	一般演題発表(1題15分、討議15分)
	13:30-16:00	シンポジウム「精神看護の過去・現在・未来」 司会: 武井麻子(日本赤十字看護大学) シンポジスト: 交渉中

====平成4年度学術集会・一般演題募集====

*題名締切: 平成3年12月12日(事務局宛葉書にて郵送)

*抄録締切: 平成4年3月10日(事務局必着)

・規定の用紙(1600字以内)にまとめる

・共同研究者も学会員とする

=====

事務局から

1. 平成3年度年会費納入のお願い

平成2年度からの学会員の皆様は、平成3年度年会費7,000円を同封の振込用紙にてお早めにご納入下さい。振込用紙は、必ず、1人1枚ご使用下さい。

なお、すでに納入された方には、振込用紙を同封いたしましたこととお詫び申し上げます。

2. 平成3年度から、入会を希望なさる方には、理事会の審査がございます。入会に関するお問い合わせは、62円切手を貼った返信用封筒を同封のうえ、事務局までお願いいたします。

3. 「第1回精神保健看護学会・学術集会抄録集」の送付についてのお問い合わせがありますが、在庫がございませんので、ご了承下さい。